



終わりの世界から

～The beginning of a journey～

はじめに

～概要～

幼馴染の君と過ごしてきた、今日までの日々。

その日常はほんの些細な出来事で終わりを告げた。

あたしは過去へリープする。

君と、また新しい恋をする為に。

「終わりの惑星の**Love Song**」の一曲目「終わりの世界から」

という楽曲の二次創作です。

物語の展開や登場人物は、私自身の解釈で書いたものとなっています。

※この短編は「麻枝准*やなぎなぎ」さんの楽曲集。

～目次～

はじめに

前編

後編

奥付

～登場人物～

あたし ♀

赤毛で極普通の少女。

君との日々を再び過ごす為、過去へリープする。

君 ♂

あたしの幼馴染。

過去へリープした、あたしが出会う少年。

あたしと君は、小さな頃から互いの事を何でも知っていた。

幼い日から今日まで。

いわゆる幼馴染だった。

喧嘩もしたし、毎日の様に泥んこになるまで外で遊んだ事もある。

あたしは君に負けじと、そんな男勝りな女の子だった。

君と今日までの道を歩んで、気付けばあたし達は既に高校生。

大人と子供の境目。

やや君の事を幼馴染というよりは、一人の男の子として意識し出して、大人っぽい服とか、可愛い服とかを着だして、君の趣味や理想に合わせようとした。

今まで、ただの小うるさいガキ程度にしか思っていなかったのに、いつからだろう。

こんなに君に対して、想いを必死に巡らせる様になったのは……。

学校からの、君と一緒にの帰り道。

あたしが君に好きな女の子のタイプを半ば強引に聞き出して、肩を落とすのは毎度の事。

でも、今日の君は違った。

焦る様にして声を低くする。

誰にも言うなよな。

俺、好きな人が出来た。

周りを気にする様にして、あたしの耳元で囁く。

そんな君がこっそり教えてくれたのは、年上の綺麗な女性。

学校内では皆の人気者。

赤毛の入った様な髪を持つあたしなんかとは違う、真っ直ぐで艶やかな黒髪。

すらっとした体付きに、抜群のプロポーション。

人ゴミの中に置いても、彼女の事は一目で分かってしまう。

それほど綺麗な人だった。

君が好きになるわけだ。

そんな風に少しからかってやったら、ムスツとした顔で君に睨まれた。

いつもと同じ帰り道を君と共にし、普段通りに別れて帰宅した。

部屋の電気は消したまま、カーテンも閉めたまま……。

ベットに顔をうつ伏せて、ただ泣いた。

君の事は、ずっと好きだった。

それなのに君は、全く知りもしない綺麗な誰かに恋焦がれている。

あたしなんかじゃ、あの人には追い付けない。

もう遅いんだ。

君が彼女を好きになった時点で……もう、手遅れだったんだ。

昔、母さんから聞いた事があった。

リープ。

十代後半の少女特有の能力で、文字通り過去へタイムスリップが出来る。

私も、昔は過去へ飛んでいたものだわ。

高校生くらいになったら、きっとあなたにも出来るんじゃないかしら。

ただ念じるのよ。

自分自身が覚えている範囲で、行きたい時を思い浮かべて。

もう遅いのならリープをしよう。

追い付けないのならリープを使って、君が彼女を好きになる前に……。

こんな非現実的な事、普段のあたしなら信じようとはしなかった。

なんてバカだったんだろう。

この時のあたしは、藁にも縋る想いだった。

暗い部屋の中、ギュッと目を瞑り、両手を力強く組む。

ただ念じ続けた。

あたしが望む過去へ。

君と一緒にいて、ただ純粹に楽しかった、あの頃。

そこでまた君と出会い、また恋をするんだ。

お願い、飛んで!!

真っ暗で何も見えない。
それは目を瞑っているからだ。
ゆっくりと目を開き、視界を明かす。

あれ？　ここって……。

あたしの部屋の筈だが、明らかに今までとは違っていた。
置かれている家具やベット、カーテンの色、壁紙、あった筈の漫画や雑誌。
へたり込んでいた体を起こし、壁に掛けられた日捲りのカレンダーを見る。
六年前の十二月。
カレンダーの日付は、リープが成功した事を意味していた。
あたし達が、まだ小学五年生の頃のクリスマス間近。
この頃のあたしは、未だに君と外で泥んこになりながら遊んでいた事を覚えている。
部屋を出て、家の玄関へ向かう。
まずい、私の靴がない。
幸い、家に母さんはいないようで、今なら好き放題に行動できるというわけだ。
玄関横に立て付けてある棚から、母さんのローファーを探り出す。
さすが母さん。
高校時代の品を、まだ残してくれているおかげで、なんとか助かった。

サイズもピッタリ。

足を入れたローファーの爪先で、コンコンと床を軽く踏み、玄関の鍵を開け、ドアノブに手を掛けた。

その時、あたしが外側へ開こうとしたドアノブは、勢い良くこちら側へ押し返された。
ドアノブから手を離し、狭い玄関の中で数歩だけ後ずさる。

誰？

外からドアを開けたのは、まだ幼い小柄な少年。

一目で分かった。

この時代の君だって。

あ、ああ……えっと……。

言葉が出ず、思わず私は逃げ出した。

どうして？

分からない。

この時の君へ何を話せば良いのか分からなかったのだ。

夕陽は傾き、西日が強くなってきた頃。

私は公園の、大人が一人やっと入れるくらいの大きさの遊具の中にいた。

幸い、この時間、この場所には誰もいないようで、今を凌ぐには絶好の場所だった。

君を前にして、思わず逃げ出してしまった。

こんな事じゃ、リープして来た意味がないじゃないか。

このままじゃ、いずれ君は彼女と……。

涙が溢れてくる。

ポロポロと容赦なく溢れてくる、堪える事のない涙。

せめて、この時のあたしを見て未来へ帰ろう。

きっと笑っているんだろうなあ。

遊具から出ると、西日が強く私を照らす。

オレンジ色に染まった夕焼けが、公園の遊具を、街を、眩しく儂い色に染め、長い影を作っていた。

そんな公園に、長い影がもう一つ。

俯いていた顔を上げると、その影の主は先の君だった。

幼く小さな背中を震わせ、頬を少しだけ染めてあたしを見上げている。

幼い君は、年上のあたしを見て聞く。

あなたに似た人を探しているんです。

何か知りませんか？

息を荒げ、必死な表情で私を見ている。

そんな君に、私は愛想笑いを浮かべて、こう言うしかなかった。

ごめんね。

何の事だか、分からないや。

君はあたしに一礼し、再び走ってこの場を去って行った。

君が去った後、あたしは地にへたり込む。

あたしのせいだ。

リープは、未来から来た人に過去の人が上書きされてしまうんだ。

なら、あたしが未来へ戻れば……。

早く帰ろう。

先と同じ様に、ギュッと目を瞑り、力強く両手を握る。

お願い、未来に返して！

数分、数十分、祈り続けても、あたしがこれ以後、時間を移動できる事はなかった。

リープは一方通行。

未来には飛べなかった。

公園の遊具の中で、へたり込んでいた。
未来には帰れない。
君は、あの頃のあたしには会えない。
自分が冒した事態が腹立たしい。
心の中で自分を罵倒し続けて、また泣いた。

あの……。

遊具の外から聞こえて来る、幼い少年の声に振り向く。

外から中を覗いていたのは、君だった。
慌てて涙を拭いて、笑顔を作る。

俺、どうしても気になって。
だから……その、何か知っている事とか、本当にないのかなって……。

こんなに泣きそうな君は、見たくない。
だから事情を説明しようとしたけど、寸手のところで止めた。
君に全てを打ち明ける事。
それはダメだって、どこかで気付いていたから。

どうして……さっきから、こんな所にいるんですか？

ちょっとね、家を追い出されちゃって。

歯を出して笑って見せ、信憑性のない嘘を吐いた。
しかしそんな嘘でも、君は真面目に受け止めてくれた。

じゃあ俺の家、来ますか？

この頃、君の両親は共働きで、家にいない事はよくあった事を覚えている。
その度に、あたしの家で夕飯を一緒にいたんだっけ。
でもこの時代のあたしがいない今、そんな事は出来ないんだ。

結局、あたしは君の家に泊まった。
寝る時は、両親にバレてしまわないように、君の部屋の押し入れの中に布団を敷いて。
なんだかドラえもんみたいで、少しだけ笑えた。

翌日から、君は学校をサボってまで、あたしを探し出す、と言い出した。
あたしは彼の額にデコピンを喰らわせ、その任はあたしが負った。
凄く辛かった。

あたしのせいでいなくなってしまった、この時代のあたしを探すと、君に嘘を吐いて、あたし
はこの時代をノウノウと歩いている。

次の日も、その次の日も……。

君は学校から帰ると、ランドセルを家に放り出し、すぐに街中を駆け回りに出掛けた。
そして帰って来た頃には、必ず泥んこで、ボロボロになって帰って来る。
膝や肘、体の節々にできた君の傷が、痛々しかった。
君の心も体も……全てボロボロになっていく。

やめて。

あたし、ここに居るよ。

だから、どこにも行かないで……。

あたしが君の家に来て、一カ月が経とうとしている頃。
長い冬は終わり、やがて暖かくなった気候は、春の訪れを予感させていた。
そんな時、君から両親の話聞いた。
これから両親の転勤の為、遠くの街に引っ越す事。
あたしも、家出なんか続けてないで、早く家に戻った方が良い、と。

このままじゃ、いつまでも前に進めないんです。
だから、ここを発ちます。

いなくなったあたしを残し、君はここを発つと決めた。

もし、あなたがあの人だった、よかったのに。

そう言い残した。

引っ越しは翌日から始まった。

君の両親や業者に、あたしを見られるのは面倒だと想い、あたしは君の自宅近辺で、様子を見守る事にした。

結局、何も伝えられずに、あたしはここに残るのだろうか。

嫌だ。

そんなの、絶対に嫌だ!!

今こそ、彼に本当の事を伝えよう。

今までの事を全部。

だから全力で、私の元から去っていく彼の手を取った。

そして君と同様、ボロボロになって本当の事を伝えた。

年上の綺麗な女性。

リープ。

一方通行。

過去と未来のあたしの上書き。

そして、ありがとう。

その瞬間、視界が暗転し、景色が割れた。

見慣れた街、空、桜の木、地面、そして君。

それら全てに、硝子の様な亀裂が入り、ひび割れた空間へ私は吸い込まれていった。

きっと、あたしへの罰だったんだ。
一面、灰色の世界。
崩れたビル群の景色。
その中を吹き抜ける砂埃。
全て、この目に写る現実。
それら全てが、君を騙し続けたあたしへの罰。

君と最後に話し、ひび割れた景色の隙間に吸い込まれ、この世界にやって来て、果たしてどれ程の時間が経ったのだろう。

あの時、ふと気付けばあたしが手に持っていた、古びた一枚の写真。
隅にいるあたしを含め、仲間達に囲まれて、無邪気にカメラ目線で笑っている君の笑顔が眩しかった。
そんな君に会う為、あたしは再び、この場所から旅（リープ）を始めた。

また笑えるかな、あたし。
この世界で……。

君の写る写真は、この場所に置いて再び歩き出した。

笑い合えるって凄く幸せな事。
君はあたしに、そう教えてくれたね。

その意味に、今になって気付く事が出来た気がした。

終わりの世界から ～The beginning of a journey～

<http://p.booklog.jp/book/66088>

著者：麗

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yusu/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/66088>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/66088>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ